

# 心豊かに表現する生徒の育成(最終年次)

～造形的な視点と表現・鑑賞活動のつながりを大切にした学習指導の在り方～

矢吹 怜美

Satomi YABUKI

## 概要

1年次研究では、副題を「造形的な視点を大切にした学習指導の在り方」とし、造形的な視点を手がかりに、学年間での題材のつながり等に気付かせられるよう「造形的な視点に基づいた知識を積み重ねること」、「知識の積み重ねから振り返り、発想につなげること」を重視して実践を行った。その結果、交流において造形的な視点からアドバイスをを行う生徒や、構想において前回の積み重ねを生かす生徒の姿が見られた。2年次研究では、表現領域と鑑賞領域のつながりについて、造形的な視点に基づいた学習場面を設定することで、より心豊かな表現や鑑賞につなげることができると考え実践を行った。その結果、生徒が、鑑賞の学習から造形的な視点に気付いたり、表現と鑑賞はお互いにつながりのあるものだという認識を高めたりする様子が見られた。最終年次は、「非認知能力」の育成に重点を置き、今までの実践とつなげることでより心豊かな表現や鑑賞を目指す。

キーワード：造形的な視点、主体的に学習に取り組む態度、非認知能力

## 1. はじめに～研究の目的

学習指導要領(2017年7月)では、「様々な情報を見極め、知識の概念的な理解を実現し、情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと」や、「複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすること」等が求められている<sup>\*1</sup>。また、生涯にわたって能動的に学び続ける姿勢が必要とされており、これまでの教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善が必要とされている<sup>\*2</sup>。

美術科においても、これまでの学習指導に加え、「感性や想像力等を豊かに働かせて、思考・判断し、表現したり鑑賞したりするなどの資質・能力を相互に関連させながら育成することや、生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての実感的な理解を深め、生活や社会と豊かに関わる態度を育成すること等」について、更なる充実が求められている<sup>\*3</sup>。

これらを踏まえ、本校美術科では心豊かに表現する生徒の育成を目指し、造形的な視点を大切にすること

で、主体的に学習に取り組む態度を養うための指導の研究を進めていきたいと考える。

## 2. 生徒の実態

本校美術科の1年次では、どのような方法をとれば「知識構築のプロセス」を辿ることができるかということを追究した。主題を表現することは、選択の連続である。まず主題を決める際、「何に価値を見いだして選ぶか」を考える必要がある。そこから、主題をどのような全体のイメージで、どのように表現していくか一つ一つ構想し、選択し続けながら表現していくことになる。

そこで、造形的な視点で学習内容のつながりを各題材間で関連させられるように設問や提示、交流の仕方の指導の改善を重ねた。また、生徒自身がそれらを記録に残し、自ら知識を構築することへつながるような場面を設定した。その結果、生徒の造形的な視点への認識が高まり、交流場面で造形的な視点から説明する場面が見られたり、前題材とのつながりに気づいた発言の増加がみられたりした。

2年次では、副題を「造形的な視点に基づいた『表現』と『鑑賞』のつながりを大切にしたい学習指導の在り方」とした。これまでの学びと現前の学びのつながりに気付き、そこから見いだした価値を基に、心豊かに表現することができる生徒の育成を目指そうと考えたためである。

表現と鑑賞をつなげる工夫では、造形的な視点を意識させるような学習過程を鑑賞の学習に組み込んだ。表現と知識をつなげる工夫では、ワークシートに知識に関する記述を積み重ねることで、獲得した知識を適宜俯瞰(メタ認知)しできるようにした。その結果、生徒が鑑賞で培った内容を活用して、造形的な視点から自身の構成を振り返って表現する様子が見られたり、前題材で得た素材や色彩についての知識を自身の作品に生かそうとしたりする姿を見ることができた。

以上から、生徒の認識において、「鑑賞」と「表現」は別個のものではなく、お互いにつながりのあるものだという認識を高めることができたと感じている。

しかしながら、以下のような課題もある。

- ・学年をまたいで知識のつながりをもたせること
- ・鑑賞において、交流する機会を増やすことで造形的な視点についてもっと多角的に触れさせること

以上から、「学校外の生活や将来の社会生活も見据え、生活や社会を造形的な視点で幅広く捉え、美術の表現や鑑賞に親しんだり、生活環境を美しく飾ったり構成したりするなどして、心潤う生活を創造しようとする態度」\*4を養うための土台を育み豊かにしていくことが必要だと考える。この土台とは、つまり表現活動や鑑賞活動といった体験的な学習を通し、知識を発見したり、学年をまたいで身に付けた知識のつながりに気付き、別の場面で活用したりすることである。その土台に立ち、造形的な見方・考え方で振り返ることを大切にすることで意欲が高まり、心潤う生活を創造しようとする態度が養われていくと考える。また、交流の機会を増やすことで、意欲がさらに高まり、より心豊かに表現していくことにつながる。それが、最終年次の本校研究における「非認知能力」とつながるものであると考えられる。

なお、造形的な視点を通して振り返ることは、自己調整的な学習、特にメタ認知においても重要である\*4。美術科でいうと、生徒のもっている主題が『動機づけ』(どう考えているか)、発想や構想の考え方が『学習方略』(ど

う取り組むか)、作品に取り組む過程が『メタ認知』(どうなっているか)にあてはまる\*5。

本校美術科では、美術科で培った資質・能力、つまり生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力をどのような方向性で働かせていかに重点を置いて研究を進めていきたいと考えている。

## 2. 1. 目指す生徒像

本校美術科では、以上を踏まえ、3年次研究の目指す生徒像を以下のように設定した。

- ・今までの学びとのつながりに気付き、新たな知識を積み上げる生徒
- ・他者と意見を交流し、新たな価値を受け入れることができる生徒

## 3. 研究主題及び副題

心豊かに表現活動を行うためには、鑑賞活動に裏打ちされた造形的な視点が養われていることが肝要であり、鑑賞や表現活動を行う際に、造形的な視点とのつながりを意識する学びが必要であると考えた。このことから、本校美術科の最終年次研究の主題と副題を以下のように設定した。

心豊かに表現する生徒の育成(3年次)  
～造形的な視点と表現・鑑賞活動のつながりを大切にしたい学習指導の在り方～

ここでいう造形的な視点とは、造形を豊かに捉える多様な視点であり、形や色彩、材料や光などの造形の要素に着目してそれらの働きを捉えたり、全体に着目して造形的な特徴などからイメージを捉えたりする視点のことである\*6。この造形的な視点を手掛かりに、生徒が日常生活や社会の中の美術の見方・考え方に気付き、それらを心豊かに表現していくことを目指す。

そして、その表現の意欲を高めるために重要なのは、

- ・題材ごとに素材についてまとめ、知識を積み重ねること(ICTの活用)。
- ・対話的に他者と学習していくこと(鑑賞・交流の重点化)

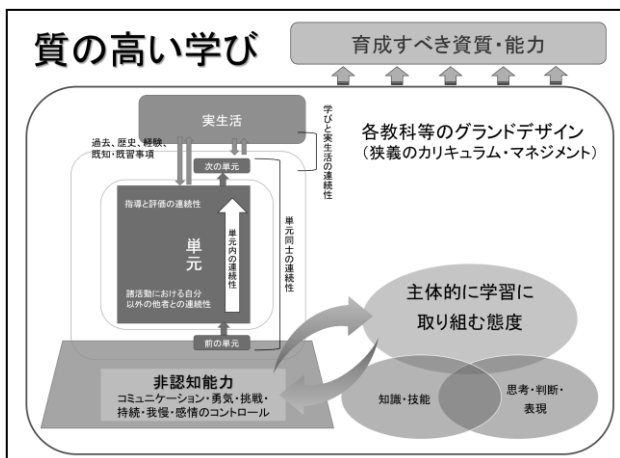
この2点であると考えます。

#### 4. 研究の内容と方法

本校の最終年次研究においては、生徒の実態やこれからの時代の潮流を踏まえ、引き続き「質の高い学び」に向かうために、単元や題材における「連続性」、さらには高めたい「資質・能力」を踏まえた単元や題材の全体構想(以下、グランドデザイン)というものを設計することが重要であると捉えている\*7。

なお、本校研究の概要にもある通り、このグランドデザインにおいて特に重要視しているのは「主体的に学習に取り組む態度(≒非認知能力)」へのアプローチである。主体的に学習に取り組む態度は、学びに向かう基軸となるものであり、その高まりがさらに質の高い学びを生み、ひいては各教科等における資質・能力の育成につながるものと考えられるためである。

これらのことを踏まえた本校の最終年次研究の構造図は以下である。



本校最終年次研究の構造図

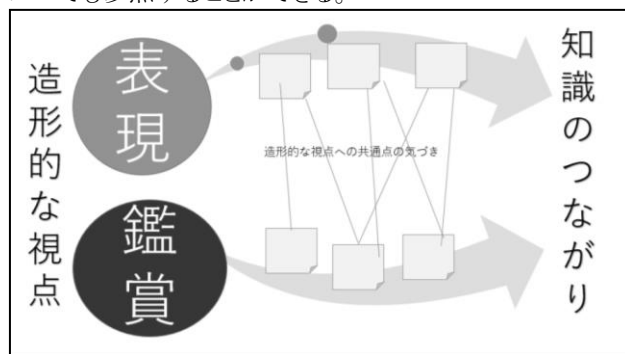
この中で、本校美術科では、「単元(題材)同士の連続性」や「非認知能力の育成」に焦点を当てて実践研究を進めることとした。

##### 4. 1. ICT の活用による知識のつながりの可視化

小塩(2021)によると、「特殊的好奇心の特徴には、情報のズレや矛盾に敏感な傾向があり、また不調和の原因となる特定の情報を探索し、解消できるまで、持続的かつ積極的な探索傾向があり(P.69)」,それを授業に活用する際には、「『適度な情報のズレ』状態の前段階には既存知識や先入観の構築が必要であり、すなわち【問題】【予想】のセクションでの新しい課題の把握、予測を立てる思考や、【討論】のセクションでの他者の意見の把握といった思考活動や行動が必要(P.81)」と記している\*8。

本校美術科においても、身に付けた知識を生かし、自ら考えるためには、知識が自力で取り出し可能であることが前提条件としてあり、まず身に付けた知識の存在を認識させることが必要である。それをクリアして初めて前の題材と今の題材の共通点に気づき、知識のつながりを生かすことができるようになると思う。そして、既存知識と新たな情報とのズレに気付くからこそ、好奇心をもち意欲が高まると考えられる。

知識のつながりに気付かせるために、まずは題材の中で[共通事項]や造形的な視点に着目させる。そして、そこで気付いたことや得た知識を可視化する。その手立てとして、ChromeBook を使用し、Google スライドを利用してまとめさせることで、付け足しやレイアウトの変更が容易となり心理的負担も下げることができる。また、生徒自身のドライブにもデータが残るため、学習資源としていつでも参照することができる。



表現と鑑賞の往還の際の「知識のつながり」の構造図

##### 4. 2. 他者との協働による自己肯定感の醸成

創造活動の喜びは、自己の心情や考え、他者への思いや願い、イメージ、などを自分の表現方法で作品として実体化することができた時に実感することができる。なお、それは、造形的な視点を意識させるような学習指導を鑑賞や表現の学習で行う中で、知識などを基に自分が表現したい主題をしっかりと意識して考え、それぞれの考えを交流するなどして育まれていくものだと考える。

例えば、絵画を鑑賞した際、「なぜ何も描いてない部分があるのだろう」、「なぜかあの部分が目立つ」等の感想を抱くとする。そこに着目した理由を、どうしてなのか自分で考えさせ、その後交流させる。他者との交流ではわからなかったことを、Chromebook を使用するなどして調べさせる。

それぞれ着目する部分は異なるが、「造形的な視点で」という軸で交流していくことで、学びが生まれると考える。その軸の上で共通点や相違点を見つけたり、そこから新たな価値を見いだしたりする活動を通し、互いの価値観を受容し合うことで、「非認知能力」の一つの側面である自己肯定感を抱かせることにつながっていくと考える。

## 5. 実践と考察

題材「日本の美意識」「作品を視て」(3年)

### 5. 1. 題材の構想

1つ目の工夫「知識のつながりの可視化」の視点においては、Chromebook を用いて、試しの活動でわかったことなどについて Google スライドにてまとめを行った。それにより、①実際の写真などを容易に掲載・訂正することができ、②提出後も、自由に自身でスライドをみて確認することが可能となることで、既存の知識のつながりが見えやすくなることを狙いとした。

2つ目の工夫「他者との協働」では、鑑賞・表現の両方の活動で交流の機会を確保した。その際、①着眼点を自身で選ぶことにより、自己肯定感の向上・非認知能力の伸長に寄与する、②1つの作品について様々な視点から鑑賞していくことによって新たな価値の発見(知識)であったり、受容する態度の伸長につながることを狙いとした。

なお、本題材のおおまかな計画は以下の通りである。

時	学習内容	評価基準
1～2	○「日本の美意識」試し活動	知
3	○鑑賞1 日本の美術	知 思 態
4～5	○「日本の美意識」構想	思
6	○鑑賞2 東洋の美術	知 思 態
7～9	○「日本の美意識」制作活動	技 態 表
10	○鑑賞3 東洋と西洋の美術	知 態 思
11～15	○「日本の美意識」制作・交流	態 思

### 5. 2. 授業の実際

本題材は鑑賞と表現を交互に取り組み、関連させる構成とした。具体的には以下の通りである。

- ①第1・2時は、蒔絵と螺鈿を実際に体験し、どのような性質のある素材なのか、一番使いやすい道具は何か考える活動を行った。
- ②第3時は、これからどのように花鳥風月を表現していくか、既存の作品を鑑賞していくなかで知識を取り入れたり理解を深めたりする活動を行った。
- ③第4・5時では、鑑賞で学習したことを振り返りながら作品の構想を考え、その構想の相互交流を行った。
- ④第6時では、鑑賞を行い構想についての比較材料を増やした。
- ⑤第7～9時では、テーマを踏まえつつ、適宜改良をしながら作品制作を行った。
- ⑥第10時では、鑑賞に取り組み、東洋と西洋の様々な場所の作品から知識を蓄えた。
- ⑦第11～15時では、これまでの活動を踏まえ、制作・交流を行った。

### 5. 3. 結果と考察

第3学年の鑑賞では、余白の効果が感じられる作品を構想時・制作前・制作途中に挟むことで、自身の作品と鑑賞とをつなげられるよう時数の配分を工夫した。その結果、88%の生徒が「鑑賞を作品に生かすことができた」と答えている(資料A)。

#### (資料A)

- ・3年鑑賞では色・形・素材などを元に作者はこんな意図を持ってこの作品を作ったのではないかと、など考察したが、今回は作る側となって、ここでは没骨法を用いることで重厚感を出そう、など鑑賞で得た知識をもとに作品を作ることができたから。
- ・多くの作品を鑑賞したことを通して、道具によって、ぼやかしたり、ハッキリ書いたりなど、素材によって、与える印象の違いを身をもって感じる事ができたので、今回の作品作りでも、強調したい部分は、濃く、中も塗るなどの工夫をできたから。また、色が無い作品もいくつかあったため、それらからは、形がもたらす印象や、あえて色をつけないことによる効果などを学び、それを例えば、お盆の余白で活かすなどすることができたから。

昨年度とのつながりを意識するように、試しの活動時より「素材」「形」などのキーワードを用い問いかける工夫を行った。その結果、86%の生徒が「2年生の時の題材で得たことを活かすことができた」と答えた(資料B)。

構想時・制作時に生徒同士で作品について交流する機会を設定することで、多角的な視点からみる機会を確保するようにした。その結果、86%の生徒が「交流を生かすことができた」と返答した(資料C)。

さらに、「交流時のアドバイスや制作途中の気づきから、構想と変えた部分があったか」という問いには、75%の生徒が「変更があった」と返答した(資料D)。

(資料B)

・図案によって形をわかりやすくするにはそのまま切り抜くか、輪郭を残して切るかを考える必要があると学んだので、蒔絵で図案を塗るときも、塗りつぶしても形が分かるか、輪郭だけを塗ったほうが分かりやすいかを考えながら制作できたから

(資料C)

・制作途中段階で、仲間と交流したときにあまり自分の意図していることが伝わっていないように感じたので、どうやったら自分のテーマが伝わりやすいかというのを考えながら自分の作品をより良くしていくことができたと思う。また、他の人の表し方や工夫の仕方をする中でこういうやり方もあったんだと視野も広がり自分の作品に活かすことができたと思うため。

(資料D)

・構想段階では余白を意識しようと、本当にメインの文様だけ描いて終わりだったけれど、それらを書き終わって見ると余白の美しさではなく、スカスカさ貧相さが目立ってしまい、鯉が優雅に泳ぐ様子が表せられないと思ったから。



知識をつなげる工夫については、資料A～Dのように前学年や試しの活動、構想等を振り返り、本題材に生かす様子がみられた。

他者と協働して学習する工夫では、資料C・Dのように他者の視点を理解し取り入れたり、鑑賞での交流時の仲間の発言を取り入れたりする様子が見られた。

これから、鑑賞時・交流時・表現時の視点を共通することで、題材間につながりに気付く生徒の育成に高価があったと考える。また、知識同士をつなげるためにまとめる作業を行うことで、当初の効果だけでなく、素材や技法に関するメタ認知を高める効果も感じられた。

## 6. 今次研究の成果と課題

本校美術科では、今次研究の主題を「造形的な視点と表現・鑑賞活動のつながりを大切にした学習指導の在り方」と掲げて研究をスタートさせた。

本稿では、これまで最終次研究について述べてきたが、以下に今次研究全体の成果と課題、および今後の新たな研究に向けての展望を述べる。

### 6. 1. 研究の成果

令和2年度から令和4年度にかけて、題材間につながり、ひいては知識のつながりを大事にすることで、より心豊かに表現することができるのではないかと仮定し、授業改善に取り組んできた。その成果が、以下の表に示した、振り返りにおける生徒の肯定的な回答である。

質問項目	割合
「鑑賞を作品に生かすことができた」	88%
「2年次の題材で得たことを活かすことができた」	86%
「交流を生かすことができた」	86%
「交流時のアドバイスや制作途中の気づきから、構想と変えた部分があったか」	75%

この結果から、「学年をまたいだ知識につながりをもたせる」、「鑑賞において、交流する機会を増やすことで造形的な視点についてもっと多角的に触れさせること」など、本校美術科において前年次研究で課題となっていたことに一定程度の改善が見られた。

また、「交流時のアドバイスや制作途中の気づきから、構想と変えた部分があったか」に対する肯定的な回答が75%となっていることから、交流を行ったことが、自分

の活動をメタ認知したり、自己調整的に製作活動を行ったりすることに結び付いたと考えることができる。

## 6. 2. 今次研究の課題と展望

前述の通り、今次研究では、鑑賞や創作の時に交流の機会を意図的に増やすことで、生徒の意識に変化が見られた。

その一方で、先ほどの振り返りにおける生徒の記述を読んでいくと、「自分の意図していることが伝わっていないように感じた」、「他の人の表し方や工夫の仕方をするのでこういうやり方もあったんだ」など、自分の意図の「どこが」伝わっていないのか、他の人の「どんな」工夫が良かったのかを具体化できていない表現が目立つのも事実である。

こういった美術科独自の課題ともいえる「自分の意図を適切に言語化できるようになる」ということも、「心豊かに表現する」ということの重要なファクターなのではないかと考える。

新たな研究では、今次研究を踏まえながら、生徒がより心豊かに表現できるよう実践研究を進めていきたいと考える。

## 参考文献

- (1)森本信也「子どもの論理と科学の論理を結ぶ理科授業の条件」東洋館出版社.1993
- (2)北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(67)」
- (3)北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(66)」
- (4)文部科学省.「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説美術編」.2017
- (5)伊藤 崇達.「BERD 13号「自ら学ぶ力」を育てる方略-自己調整学習の観点から-」Benesse.2008
- (6)中山芳一「学力テストで測れない非認知能力が子どもを伸ばす」東京書籍.2018
- (7)R.リチャート.M.チャーチ.K.モリソン「子どもの思考が見える21のルーチン」北大路書房.2015
- (8)北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(68)」
- (9)小塩真司「非認知能力」北大路書房. 2021

---

## 注釈

- \*1 学習指導要領解説美術編 p.1
- \*2 学習指導要領解説美術編 p.3
- \*3 学習指導要領解説美術編 p.19
- \*4 この詳細については、北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(69)」の美術編に述べている。
- \*5 この詳細については、北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(68)」の美術編に述べている。
- \*6 不明
- \*7 グランドデザインについては、本研究紀要の「総論」に詳細を述べている。
- \*8 不明